

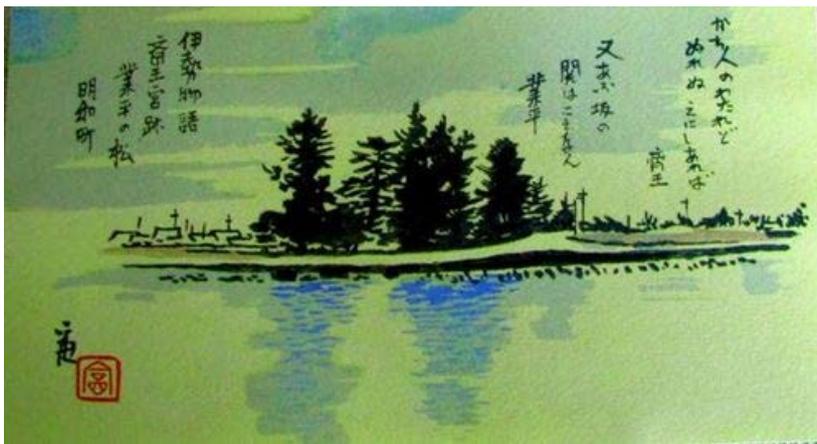
3.19 赤福餅の葉

赤福は、以前、賞味期限切れのものの再使用で問題を起こしたのですが、それを食べて病気になる人がいる訳でもなく、私は、以前も今も、大阪方面に行ったときは必ず買って帰るほど好きなお土産です(なぜか新大阪、京都駅で売っているのです)。

あ、ここで、赤福の美味しさについて述べようとしているわけではありません。私が、気がついたのは、その中に、一枚の葉(しおり)が入っていたこと。迂闊にも、今まで私は、よく買う赤福の中に、このような葉が入っていることに気がつきませんでした。そこには、伊勢物語の歌が書かれていました。赤福さん、伊勢の文化を紹介してたのに、気がつかないで、ゴメンナサイ。

葉に載っていたのは、「在原の業平」と「伊勢の斎王の宮」との間で交わされた恋歌。

かち人の 渡れど濡れぬ えにしあれば (斎王)
又あふ坂の 関はこえなむ (業平)



さて、この伊勢物語、名前は知っている、高校時代に習ったことがあるような気がするけど、という方が多いのですが、

「唐衣 きつつなれにし つましあれば…」というカキツバタを詠み込んだ歌や「名にしおはば いざこととはん 都鳥…」という歌を聞くと、ああ、あれかと思い出される方もおられると思います。

物語の主人公は、「在原業平」クン。

世間では、彼、日本のドン・ファンと言われているようなのですが、これは、私に言わせれば、かなり可哀想。

確かに、あっちこっちで美しい女性に手を出しているから、しょうがないかと思わないでもないけど、伊勢物語を通して読むと、彼は、教養があり、良い歌を詠み、友情に厚く、まめでなかなか誠実で、女性に優しく、かといってべたべたしない、狩りもできて、イケメンの好男子。ちょっとくらいケシカランことをしても許されちゃう、福山雅治クンのよ

うな男。

さて、そろそろ本題に入らなければ、また長くなってしまう。

本題は、赤福のこの歌なのですが、普通の高校の古文では絶対に習わない伊勢物語の第 69 段に出てきます。

伊勢物語は、「伊勢物語」って名が付けられているのに、なぜか伊勢の国の物語は非常に少ないのですが、この歌が載っている第 69 段は、その数少ない伊勢の物語なのです。お読みになったことのない方のために、内容をメッチャ短くまとめますと、次の通りです。

昔、業平クンが「狩りの勅使」として伊勢の国に出向いた際、彼、心を込めて世話をしてくれた伊勢神宮の斎王様に心奪われ、ある夜、斎王サンに秘かに「デートして」と伝えたのです。斎王サンは、これに応じて一人で業平クンのところに忍んでいくのですが（斎王サン、大胆ですねえ！）、その夜は互いに言葉を交わすだけで、時間切れ。

次の日、斎王サンから業平クンに届いた歌。

君や来し 我や行きけむ おもほえず 夢か現か ねてかさめてか

[拙訳]

（昨夜確かにお目にかかったような気がするのですが、私には、あなたがいらっしゃったのか、私が伺ったのか、思い出すことができないのです。あれは夢の中のことだったのでしょうか、それとも現実のことだったのでしょうか）

業平クン、ものすごく感激して返した歌。

かきくらす 心の闇に まどいにき 夢うつつとは こよひさだめよ

[拙訳]

（実は、私の方も、思いがけなくお逢いできて心取り乱し、目の前が暗くなって、何が何だかわかりませんでした。昨日のことが夢か現実かは、今宵もう一度お逢いしてはっきりさせたいと思っています）

ところがです。

この日、運悪く、突然、伊勢の国守から宴会の申し出があり、さすがの業平クンも仕事優先、とうとう斎王サンとの約束が果たせなかったのです。

こういうのって、よくありますよね。

時代を問わず、国を問わず、悲恋のラブストーリー。

次の日、都に帰らなければならない業平クンの許に、斎王サンから届けられた歌が赤福の

葉の歌。

かち人の 渡れど濡れぬ えにしあれば（斎王）

[拙訳]

（私の住む斎宮殿の前の入江（え）は、浅くて、歩いて渡っても着物の裾が濡れません。あなたと私の縁(えにし)は、契るに至るほど深くはなく、この入江のように浅かったということかも知れません）

これに対する業平クンの下の句。

又あふ坂の 関はこえなむ（業平）

[拙訳]

（いいえ、私とあなたの縁は、きっと再び、逢坂の関のような困難や障害を乗り越えて、互いに都でお逢いすることになるに違いないと思っています）

うまいこと言いますね。どちらも相手が好きなんですね。

実は、この未婚の斎王「恬子内親王」と「在原業平」の恋が書かれた第 69 段、元は伊勢物語の冒頭にあったという説があるのです。

伊勢物語という名が付く由縁となったといわれる数少ない「伊勢」についてのお話なのです。

5.31 平家物語と沙羅双樹

NHKの大河ドラマ「平清盛」が不評だそうですね。

私、連続ドラマを続けてみるだけの余裕がない情けない生活をしているせいか、余り関心がなくて、気にしていなかったのですが、画面が汚い、面白くないとか、視聴率が史上最低とかいう報道があったので、見てみようかなと思いました。

我ながら、これは、ちょっと天の邪鬼。

今回のドラマの基になっているのは、言わずと知れた平家物語や保元物語・平治物語。

私、太平記と並んでこれほど面白い物語はないと思っていましたので、これを下敷きにしたドラマが面白くないというのは、考えられないと思ったのです。

よほど無能な脚本家でも、これは学芸会かと思ったことがある昔のNHKの朝のドラマよりはマシだろうと思っていました。

さて、自分で見た結果ですが（1回みただけではと思い、先々週、先週、今週の三回見ました）、いやー、なるほどね。

なんとも説明しにくいけれど、不評なのは分かるような気がしました。

私が見た場面は、ちょうど、「保元の乱」の前後の頃で、ほぼ保元物語に書かれている内容と同じ。大変面白いところでした。

この時代の歴史を学んだ方は、この戦いが、摂関政治から武家政治へのターニングポイントとなった極めて重要な意味を持ったものということをご承知かと思います。

このドラマでも、その点は丁寧に描かれていて、朝廷政治を牛耳っていて歴史上「悪左府」として有名な左大臣藤原頼長が、現実の戦に臨んでは狼狽えるばかり、武力を戦わせるプロの武士の前では、なんの力もないことがはっきりするところなどは、よくできていると思いましたね。

私など、ちょうど今の○主党と×民党の間で行われているなんの意味もない時間つぶしのお芝居のような政治を、まるで揶揄しているのではないかと思ったほどです。

じゃあどうして、不評なのが分かると思ったかですが、

このドラマ、まるで、この面白さを分からないヤツは見なくても良いつて、思っているんじゃないかと思えるほど、不親切なのですね。

世の中に、平家物語ならともかく、特に、保元物語なんぞを読んでいる変わり者がどれだけいるか、こんな混乱の時代を理解できるオタクの数など知れているのだから、少なくとも、今、何が起きているかくらいは、ナレーションで、易しく説明しなくちゃ、見ている方は、何、これ？ だと思いますよね。

それにね、話の主な筋にあんまり関係がない登場人物を出しすぎですね。
外国物の推理小説によくあるけれど、登場人物の聞き慣れない名前が次々に出てくるだけで、もう読む気がしない、ってのと似てるかな？

最後に、個人的な印象だけれど、主人公を演じている俳優？に魅力がなさすぎるような気がしました。ファンの方、ゴメンナサイ。でも、適役ってあるんですよ。

ところで、話が全く違うけれど、私の家の庭の「沙羅の木」に花が咲きました。
白い、可憐な花で、最近、あちこちでよく見かけます。
平家物語の冒頭に出てくる「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」に続く、
「沙羅雙樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす」の日本版の沙羅です。
邦名、「夏椿」。



まあ、ご存じの方も多いのですが、お釈迦様の入滅の際に身を横たえたと言われる本当の「沙羅」の木は、日本では殆ど育たないので、代わりに、わが国ではこれにしたという木ですね。

日本では、ホンモノの沙羅の木を見ることは滅多に出来ないのだから、どの木でも良いのですが、やっぱり本物の花はどんなの？ って、気になりませんか？

私、昔、沙羅の木を植えた後に、気になって調べたことがあるのですよ。
それが、ホンモノは、我が家の沙羅の花とは全く似ても似つかぬものなんですね。
見なきゃ、良かった。写真参考



我が国の沙羅の木、白くて、ぽとりと落ちる夏椿の花は、インドの本当の沙羅の木 (Shorea robusta) より、遙かに日本人の心の中の「盛者必衰」と良くマッチしていると思います。

あ、そうそう、沙羅雙樹という木はないですよ。

雙樹は、双つの樹のこと。

直径1尺以上ある大きな二本の沙羅の木の間、お釈迦様は身を横たえられたのですね。すると、沙羅の木は時ならぬ花を咲かせ、辺りはジャスミンのような芳香に包まれたそうです。

ちなみに、夏椿には、残念ながら芳香はありません。

9.14 小督の局

平家物語の中には多くの悲話がありますが、その中でも私が好きな『小督（こごう）』は、涙を誘う引き裂かれた恋の物語です。

有名な話ですので、ご存知の方も多いと思いますが、大略を申し上げれば、

後白河法皇の息子の高倉天皇は、平清盛の娘「徳子」（後の建礼門院）と結婚させられるのですが、琴の名手で絶世の美女であった小督（こごう）と恋に落ちます。清盛は、この小督を亡き者にしようとし、これを察した小督は、自ら嵯峨野に身を隠すのです。

小督を忘れられない高倉天皇は、ついにある仲秋名月の夜、弾正少弼源仲国（みなもとのなかくに）に小督を捜し出すように命じます。

ここからは、平家物語の原文に近い形で、

亀山のあたり(辺)ちかく、松の一むら(群)ある方に、かすかに琴ぞ聞こえける。
峯の嵐か、松風か、
たづ(尋)ぬる人の ことの音か、
おぼつかなくは おもへども、
駒をはやめて行程(いくほど)に、
片折戸したる内に、琴をぞひ(弾)きすまされたる。
ひか(控え)へて是をききければ、すこしも紛ふべう(可)もなき
小督殿の爪音なり。楽はなんぞとききければ
夫をおもふてこふ(恋う)とよむ 想夫恋といふ楽なり。

現在も渡月橋の北詰にある石橋は、琴聴橋とも、駒留橋とも呼ばれ、「琴きゝ橋」という石碑が立っています。写真。



探し出された小督は、高倉天皇の深い心に動かされ、宮中に戻り、密かに姫君を生むのですが、これを知った清盛は、小督を出家させ、無理矢理引き離してしまうのです。

愛する相手を失ったことに絶望する高倉天皇に追い打ちをかける形で、父、後白河法皇が

平家打倒の陰謀のかどで鳥羽殿に幽閉され、失脚します。
高倉天皇は、これらの心労がもとで亡くなります。
生きていても、会えないことほど、辛いことはありません。
享年僅かに 21 歳でした。

嵐山と嵯峨野は、京都を訪れる多くの方々が行かれるところですので、
この物語を知って、嵯峨野にある小督塚を尋ねる方も少なくありません。
でも。

小督が出家して入ったのは、東山の清閑寺。写真



お亡くなりになった高倉天皇の陵は、遺詔で清閑寺境内にもうけられました(後清閑寺陵)。

死んでまでも愛する人の近くにいたいと思う心は、さすがの清盛も止められなかったのでしょうね。

このような恋をなされた高倉天皇は、ある意味では、悲しいけれど、幸せな方だったのかも知れません。

小督の墓は、御陵の傍に寄り添う形で、ひっそりと 800 年の間二人一緒の時を過ごしていますから。

清閑寺は、知る人ぞ知る紅葉の名所。

高倉天皇と小督の燃ゆる想いのように、深紅の紅葉が美しい、ひっそりとしたところです。
遙かに、京の街が望めます。

余談になりますが、以前、絶世の美女は、決して幸せではないと申し上げたことがありました。小督もまた、絶世の美女として、悲しい運命を辿ったと言えます。

藤原俊成の娘の書いた日記では、小督は、尼となり、歳をとっても額の生え際の美しい、
清爽な女性であったと書かれています。

9.17 げに恐ろしき天の羽衣

天の羽衣のお話は、丹後、近江、大阪、鳥取、千葉など（ナント沖縄にも）あちらこちらにあります。一番有名なのは、なんと言っても、今の静岡の三保の松原。

ストーリーは、結構バラエティに富んでいるのですが、基本は、天女の美しさに心奪われた男が、天女を引き留めるため、脱いだ天の羽衣を隠して、戻れないようにするという点にあります。

（なお、外国にも似た話があって、「ニーベルングの指輪」のワルキューレも天を飛ぶ羽衣を持っていて男に羽衣をとられてしまいます。）

これらのお話を読んで、私は、天の羽衣は、単に空を飛ぶための道具だと思っていました。

ところが、竹取物語をちゃんと読んで見て、天の羽衣には、飛ぶという機能だけでなく、かなり恐ろしい機能があることに気がつきました。

月に帰らなければならず、天からの迎えが来たかぐや姫は、しばしの猶予を請うて、竹取の翁などとの別れを惜しむのですが、

ナント、迎えに来た天人達は、実に官僚的で、一刻も早く、任務を達成するために、持ってきた箱の中から、天の羽衣をとりだし、かぐや姫に着せようとするのです。

そのときのかぐや姫の言葉。

「衣着せつる人は、心異になるなりといふ。ものの一言言ひ置くべきことありけり。」

[拙訳]

（羽衣を着た人は、人の心とは異なる心になると聞いています。そうなる前に、お世話になった方々に一言だけ言っておかなければならないことがあります）

そして遂に天の羽衣を着せられて、月へ帰って行く場面。

「天の羽衣うち着せたてまつりつれば、翁を、いとほし、かなしとおぼしつることも失せぬ。この衣着つる人は、物思ひなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、昇りぬ。」

[拙訳]

（天の羽衣を着ると、これまで育ててくれた翁を愛おしい、別れが悲しいと思っていた心は消え失せてしまいました。羽衣を着ると、思い煩うという人間の心がなくなってしまうのです。かくして、かぐや姫は百人ほどの天人と一緒に空に上って行ってしまいました。）

天の羽衣には、天を翔る力があるだけでなく、人の心や悩みを解消してしまう力があるのですね。

ところで、この羽衣、何でできていると思いますか？

絵をみる限り、薄くて風に翻っているから、薄絹？

ブー

蜘蛛の糸？

ブー

芥川龍之介ではありません。

実は、これ、鳥の羽根。

ちなみに、ワルキューレが着ていた羽衣は、白鳥の羽根で出来ていたといわれています。

でもね、これ、ちょっと陳腐だと思いませんか。

私には、天人の世界って、そういうものだとは思えない。

私は思うのです。

人の情けをなくして生きること、痛みもなくて、喜びもなくて、愛することもできずに、生きて、どんな意味があるだろう。

たとえ、人間の寿命の何万倍も生きられるとしても、私には、そんな寿命なんて欲しくはない。

羽衣は、きっと人間の心を遮断するため、鳥の羽だけでなく、天人の身体を流れる蒼い血と冷たい月の光で作られているに違いない。

かぐや姫は、どうして人間の世界に下ろされたかご存じですか？

竹取物語では、次のように書かれています。

「かぐや姫は罪を作りたまへりければ、かく賤しきおのれがもとに、しばしおはしつるなり。」

つまり、天上で罪を犯したために、賤しき世界の賤しき翁のもとに、流刑になっているのですね。そして、流刑期間が終わったために、迎えに来たというわけです。

私は、これを読んで正直頭にきました。

「何が賤しき世界だ！ 賤しき世界で大いに結構。てめえらに分かってたまるか！ とつとと姫を置いて帰りゃがれ！！！」

最後は賤しき言葉になってしまいました。ご容赦を。

10.10 猫の官位

先日、十三夜の月見を始めた宇多天皇が無類の猫好きだったことを申し上げましたが、猫が人間社会の中に入り込んできた時期は、犬よりかなり遅いのです。

犬が、狩猟の時代から人間のサポートをしていたのに対して、猫が人間社会と関係を持つようになったのは、農耕が盛んになり、農産物を貯蔵することができるようになってからのことだとされています。

牧畜・狩猟社会で重きをなしていた犬に代わって、食物を食い荒らし、はやり病いをもたらすにつつき敵ネズミを退治する能力を備えた猫は、農耕社会ではその地位を逆転させるのですね。

人間の指示に従って、組織的行動で、ゆっくりと他の動物を追い詰めていく犬と異なり、1対1で、瞬発力と戦闘力という個有の能力を活用してネズミを仕留める猫は、対照的な性格を有していると考えられます。

アメリカのアニメ映画に「トムとジェリー」という猫とネズミが出てくるものがありましたが、トムという些か攻撃的でドジな猫の本名は、「トーマス・キャット」。つまり、「トム・キャット」。

F4 ファントムの後継機として、30年近くアメリカ海軍の主力艦上戦闘機としての地位を占めていたF14の愛称ですね。

可変翼の動きが猫の耳の動きと似ているので付けられたようですが、極めて優れたバランス機能、鋭い加速性能と敏捷性、鋭い爪と牙のような攻撃力。戦闘機同士の空中戦のことをドッグ・ファイトといいます、1対1では犬は猫にかないません。



ところで、爪と牙は別として、猫の優れた平衡感覚と正確な行動の裏には、ヒゲの存在があります。

以前、人間以外の動物には、眉毛がないと書きましたところ、ある方から、うちの猫には明らかに眉があるという指摘をいただきました。

えーっと思ったのですが、そこは調べてからと思い、まずは、百科事典と動物事典を見ますと、猫のヒゲは、「洞毛」といって体毛よりずっと深い毛根をもったもので、毛根付近に感覚神経が集中していて、ちょっとした空気の流れさえ感じることができるものだそ

うです。

これは、口の周りだけでなく、目の上、顔の横など顔の周りを一周する形で生えており、これが眉毛のように見えることもあるようです。

ところで、このヒゲ、前肢にもあるので下を見なくても動けるのだそうです。猫は、このヒゲをセンサーとしているので、正確な予測行動が可能なんですね。

ただ、私の家には、今猫がおらず、観察ができませんので、借りてきた知識に過ぎませんが。

さて、正確に調べたわけではないのですが、熱烈な愛猫家には、圧倒的に女性が多いようで、これに対して、男性の場合、どちらかといえば、愛猫家より愛犬家の方が多そうです。

心理学の本によると、動物を飼うことは、「愛情代償行為」と考えられているようで、猫を好きな方は、好き嫌いがはっきりしており、自分の心を大切にしようとするマイペース型の方が多く、犬を好きな方は、おとなしく、誠実で、協調性が高い方が多いと考えられているようです。

でも、別に猫が嫌いという男性が多いというわけでもなさそうで、結構、隠れ猫ファンの男性も多いのではないですかね。

ところで、日本猫には、白猫、黒猫、縞模様のトラ猫、白地に黒や茶のぶち猫、それに三毛猫の5種類の猫がいるようです。

あ、トラ猫は、縞の色によって、黄色と赤茶色の本家虎猫の他に、茶色と黒の錆(サビ)猫、焦げ茶色と黒の雉(キジ)猫、灰色と黒の鯖(サバ)猫といった分家虎猫がいるようです。

ちなみに、サビ猫と三毛猫はすべて雌。白い面積が多いほど雌が多く、少ないと雄が多いのだそうです。

先日の話に出てきた熱烈な愛猫家、宇多天皇が愛した猫は黒猫の雄。

「吾輩は猫である」のモデルとなった夏目家の猫も黒猫の雄です。

小説の中では、珍野苦沙弥先生の家の隣の「三毛子」に恋するのですが、哀れ憐れも「三毛子」は死んでしまうのですねえ。

さて、猫は官位を与えられた数少ない動物の一つ。

私の知る限りでは、猫の他に、平家物語の中の鷲が「五位」、五位鷲ですね。徳川吉宗が輸入した白い象が「従四位」。残念ながら犬は無位無官。

お狐さんは、正一位じゃあないのかって？

違うんです。

正一位は稲荷神で、お狐さんはお稲荷さんのお使いに過ぎないのですね。

狐は狡くて、他人の権威をちゃっかり借りてるんですね。

よく言うでしょ。虎の威を借りる狐って。

ところで、枕草子で猫が一条天皇から貰った官位は、正五位。

この猫には「命婦のおとど」（女官長）という名前があったようですが、命婦は五位以上の女官を指して使われた言葉です。

10.25 朱鳥元年 大津の皇子

今日 10月25日は、今から1300年以上前の686年（朱鳥元年）に、大津の皇子が死を賜った日。

どうも、大津の皇子に関する話は書きづらいのですね。

大津の皇子の怨霊のせい？

いえ、私の心の中では、この大津の皇子が大変魅力ある人物と見えるのですが、この時代に詳しい方は、日本書紀、懷風藻、万葉集という有数の書誌に登場する大津の皇子の事件に関する記述が、戦後の研究で、物語性の強い、後世の仮託であるという説が強くなっていることをご存じかと思います。

これがどうも自分自身の心の中に影響しているせいのようなのです。

この事件は、鵜野讃良（後の持統天皇）によるでっち上げの謀略だったということは間違いないのですが、私が心を動かされた彼の辞世の歌などが、後世の人による創作と言われるとやはり動揺してしまうのですね。

さて、鵜野讃良は、言わずと知れた天武の後。

でも、天武（当時は大海人皇子）の正妻は、天智の娘の大田皇女。

大田皇女は、大伯（大来）皇女と大津皇子を産んだ後早くに亡くなり、その後に大田皇女の妹だった鵜野讃良が後妻に入るのでね。

大津皇子から見ると、鵜野讃良は叔母で継母（ママ母）。

鵜野讃良は、自分の産んだ凡庸な草壁皇子をどうしても天皇にしたかったから、天武が亡くなると、1ヶ月も経たないうちに、邪魔な大津皇子を謀反の罪で処刑してしまうのですね。

それも、大津の皇子の友であった川島皇子の密告讒言だけを理由に。

しかも、磐余（いわれ）にある訳語田（おさだ）の自邸で彼が死を賜ったのは密告の次の日。

どう見ても、優れた文武の才能に恵まれ、人望が高かったが故に、草壁皇子を脅かすと思った愚かな母親の犠牲になったとしか思えない。

おそらく当時から、それは人の口には上らないものの、秘やかに囁かれたに違いなく、そして、なりふり構わず大津皇子を葬った鵜野讃良がなんとしても守りたかった草壁は、その僅か3年後に急逝。

さすがに心にやましいところがあったのか、彼女は、ほったらかしにしていた大津皇子の墓を二上山に再葬します。

そのときの大伯皇女の歌。

うつそみの 人なる吾や 明日よりは 二上山を我が兄(せ)と 吾(あ)が見む (165)



やむなく、鵜野讃良は、草壁の子、自分の孫に当たる幼い軽皇子（かるのみこ）を天皇として即位させるために、自ら持統天皇として即位するのですが、この軽皇子もまた文武天皇となった後、早世し、鵜野讃良（持統）の血は絶えることになります。

この時点で、大津の皇子を気の毒に思っていた人々の手によって、紀記などに、異例の記述がされたと考えるのも自然かも知れない。

大津皇子、謀反の罪でとられる直前に、伊勢神宮の斎王をしていた姉の大伯皇女のもとを、竊かに訪れているという記述も、状況的には少し無理があり、創作と言われても仕方ないかも知れない。

でも、大津を都に帰す際に、彼女が詠んだとされる歌

我が背子を 大和へ遣ると さ夜更けて 暁露に 吾(あ)が立ち濡れし (105)

二人ゆけど 行き過ぎがたき 秋山を いかでか君が 独り越えなむ (106)

の2首は、誰がなんといっても、後世の他人が作って万葉集に入れたとはどうしても思えない。

特に、前の一首、世更けて、いつかは殺されると分かっている弟を都に返す大伯皇女が濡れているのは、暁露ではなくて、彼女の涙としか思えない。

また、書紀に書かれている大津の妃山辺皇女の行動、

「被髪徒跣、奔赴殉焉、見者皆歔歔」

（髪を振り乱して裸足で走り、夫の後を追って殉死した。それを見た者は皆嘆き悲しんだ）
というのも、間違いはないと思えます。

たとえ、専門家が後世の手になる創作と判断したとしても、無実の罪で死を免れなかった悲運の皇子に、1300年の時を超えて涙することにまで、影響されたくないと思うのは、間違っていることでしょうか。

12.11 磐代の松

余り知られていないことですが、紀元 645 年、蘇我の入鹿・蝦夷親子を打倒して実施された大化の改新は、国内の政治路線の対立抗争に留まらず、当時わが国と関係の深かった朝鮮半島事情を反映したものと考えられています。

唐に後押しされた新羅と対立し、戦いを繰り返していた百済・高句麗を支援するかどうかで、国内でも政治対立が生じていたというのが、最近の古代史学の述べるところです。

私たちは、蘇我親子を倒したのは、「中大兄皇子・中臣鎌足」と教えられてきたのですが、これは、後世、勝利側の残した歴史書の示すところで、実は、当時の皇極天皇の弟「軽の皇子」と蘇我一族でありながら反主流の「蘇我倉山田石川麻呂」のグループと、中大兄皇子等との連合勢力が、蘇我主流を打倒したと考えられています。

このため、大化の改新は、軽の皇子が天皇（孝徳天皇）位につき、中大兄皇子が皇太子となって、進められることとなります。

ここで、軽の皇子は高句麗派の代表、中大兄皇子は百済派の代表、つまり半島支援派の連合が国内派の蘇我主流を倒したということでもあったようなのです。

しかし、高句麗派と百済派の蜜月時代は長く続かず、5年後の大化 5 年(649 年)、孝徳天皇に近い高句麗派の右大臣蘇我石川麻呂は謀反の罪を着せられて自殺し、実権は中大兄皇子に移り、654 年孝徳天皇は憤死。高句麗派は後退し、百済派が主導権を握るのです。

百済派の支援にもかかわらず、この 6 年後の 660 年、百済は唐・新羅連合軍によって滅亡し、662 年、百済再興のため中大兄皇子が半島に派遣した軍も白村江で大敗したため、中大兄皇子は都を大津に移し、防禦を固めることとなります。

有間の皇子の謀反事件が起こったのは、このような状況の中、百済滅亡 2 年前の 658 年のことでした。

高句麗派の故孝徳天皇の皇子である有間の皇子は、百済派の中大兄皇子にとって、どうしても排除しなければならない人物でした。

658 年 12 月 11 日、有間の皇子は、中大兄皇子の指示を受けた蘇我赤兄の罠にはまり、謀反の罪で、紀伊国「藤白坂」で絞首されます。

享年僅か 19 歳でした。

囚われて、飛鳥から護送されてきた牟婁の湯（白浜）で、首謀者中大兄皇子の尋問に答えた有間の皇子の言葉。

「天與赤兄知。吾全不知」（天と赤兄のみが知る。吾は何も知らず）
中大兄皇子の謀略に落ちた有間の皇子の無念が強く伝わってきます。

昔、若い頃、私は、この藤白の地を訪れたことがあります。

有間の皇子を祀る有間皇子神社は簡素というか粗末なもので、藤白神社の境内の片隅にありました。下の写真は、有間皇子神社。



藤白神社は、熊野鈴木氏の氏神様。なかなか立派な神社で、全国の鈴木さんのルーツとなっているようでした。雑賀孫市こと、鈴木孫市もこの神社の檀家？ですね。

熊野古道に続く藤白坂の入り口には、有間の皇子の墓と記された墓石がありますが、当時は、ひっそりとして通る人も殆ど無い山道でした。

もう一つ、どうしても行きたかったのは、有間の皇子によって次の歌が詠まれた磐代(いわしろ)。

磐代の 浜松が枝を 引き結び ま幸くあらば また帰り見む (巻2 141)

磐白乃 濱松之枝乎 引結 真幸有者 亦還見武

(もし、私に、ほんの僅かな運が残されているのであれば、今ひとたび、この結び祈った松の枝を見ることができますように。)

磐代は、藤白のある海南から 42 号を 50 kmほど南下したところで、中大兄皇子が待つ白浜の湯まで、あと 10 km少しのところでした。

一縷の望みを託して、もう一度、この松の枝を見ることが出来ればと詠う皇子の心は、今でも哀れを誘います。

ちなみに、「松が枝を引き結ぶ」のは、枝を結ぶことで、魂をそこに引きとどめようとする古代の俗習です。



この歌の碑が建てられている場所は、国道沿いの何もないところ。

車を一台停めるのがやっとで、隣には古い小屋がぼつんと建っていました。

碑の先は崖になっていて、海が望めました。

折から、沈みつつある夕陽の向こうに、西方浄土が見えるようでした。



当時の人々は、この事件が中大兄皇子と蘇我赤兄の仕組んだ謀略であったことを知っていたようです。

事件から 40 年経った 701 年、長忌寸意吉麻呂がこの結松を見て哀しみ詠んだ歌。

磐代の 野中に立てる 結び松 心も解けず いにしえ思ほゆ
磐代之 野中尔立有 結松 情毛不解 古所念

蘇我赤兄は、その後、近江朝の左大臣になり、壬申の乱で流刑になるのですが、有間皇子と同様、謀反の罪で死を賜った悲劇の皇子、大津の皇子の正妃「山辺の皇女」は、蘇我赤兄の孫娘です。

歴史の因縁を感じませんか。

12.13 興福寺？仏頭

先月まで上野の東京芸術大学美術館で「国宝興福寺仏頭展」が開催されていました。

この展覧会は、興福寺創建 1300 年を記念して行われたもので、国宝の十二神将など多くの仏像が出展されていたのですが、世間は専ら「仏頭」に集中していました。

まあ、それも仕方のないことで、この仏頭、破損しているとはいえ、白鳳時代の至高の傑作。

でも、私には、なんともつまらぬ理由から「興福寺仏頭展」というタイトルが気に入らず、心の中で、「今回は、十二神将を見に行くので、仏頭はついでにちょっと見るだけだからね」とぶつぶつ言いながら出かけました。

これって、トヨタのピンクのクラウンの宣伝で松嶋菜々子がぶつぶつ言ってるのと似てますね。



そもそも、私、奈良の興福寺って、好きではないのですね。

この寺、ご承知の通り、藤原家の氏寺。

平安時代から江戸時代まで、僅かな例外時期を除き、この寺はずっと栄耀栄華を誇ってきました。徳川期は、寺でありながら寺領 2 万石を超えて大名並みで、地位を鼻にかけての横暴な行いが目立つものでした。

私がまだ高校生の頃、この仏頭は「山田寺の仏頭」と呼ばれていました。私は、この仏頭に惹かれて、蘇我家の波乱の歴史を知り、大化の改新が学校で教わるような単純な内政上の争いに留まらず、朝鮮半島の覇権を巡るものであったことを知りました。

この仏頭は、元々山田寺の本尊薬師如来だったのですが、平家による焼き討ちで全ての伽藍と多くの仏像を失った興福寺が、山田寺を襲い、奪い取ったものであることは、私のような者でも知るところでした。

ですから、当時の美術書ではこの仏頭を「山田寺の仏頭」と呼んでいたのだと思います。

今回、私がどうにも納得がいかないのは、いつの間にかこれが「興福寺の仏頭」とされていることです。

泥棒が、盗んだ宝物に自分の名前を冠して世の中に宣伝するのは、泥棒の興福寺がするのはともかく、東京芸術大学がすることかと思ったわけです。ちなみに、その時同時に強奪された薬師如来脇侍の日光月光菩薩は、今も興福寺にあります。

ところで、山田寺は、蘇我倉山田石川麻呂が創建したお寺。

蘇我石川麻呂は、中大兄皇子・中臣鎌足と一緒に、蘇我入鹿（石川麻呂のいところに当たります）を暗殺した首謀者の一人です。

大化の改新は、中大兄皇子・中臣鎌足の百済派と高句麗派の石川麻呂らが、新羅派を一掃した事件ですが、中大兄皇子は、石川麻呂を味方にするため、その娘遠智娘（おちのいらつめ）を妻に迎え、共同戦線をはって蘇我本流に対抗するのですね。

大化の改新後、高句麗派筆頭として右大臣になった石川麻呂ですが、蘇我本流を駆逐することだけが目的だった中大兄・中臣組は、すぐ石川麻呂に無実の罪を着せ、縊死に追い込み、石川麻呂の娘遠智娘は、この事件で狂死します。

自分の妻の父を無実の罪で謀殺するのですから、この時代は、想像もできない血なまぐさい時代だったわけです。

この遠智娘と中大兄皇子との間に生まれた娘が鶉野讃良（うののさらら）。後の持統天皇です。石川麻呂の孫娘は、中大兄の弟、天武天皇の後になるのですからややこしいですね。

その後まもなく、持統の血は絶え、隆盛を迎える藤原一族の興福寺に対して、山田寺は衰退の道を辿りますが、その後もこの寺は、奈良の桜井地方の文化拠点として、我国の能楽の発祥の地となったことで有名ですね。

14世紀、桜井を拠点に活躍した猿楽座の山田美濃大夫の後を継いだ長男は宝生大夫となり、三男観阿弥は観世座を起こします。

このように、山田寺を巡る歴史は、知られることの少ない我国の歴史の影の部分に彩っています。

さて、余談が過ぎましたが、本命の十二神将は、今回、鎌倉時代の木造十二体と併せて、平安時代の板彫りの十二神将、合計24体が同時に展示されていました。

時代の違い、様式の違い、何よりも、同名の神様なのに随分顔も姿も違うものだというのに驚きました。今まで、並べて比べたことなどありませんでしたからねえ。

十二神将は、仏頭である薬師如来様を守護する神様。

よく知られているのは、寅さんで有名な帝釈天、本名は因達羅大将(イントラ)、金比羅さんで有名な宮毘羅大将(クピラ)、金剛力士さんで有名な伐折羅大将(ハサラ)があります。

彼らは薬師如来様を守る8万4千の兵を率いる師団長で、それぞれ7千名の部下を持っています。

さすがに、部下の手前、えへら、へらしているわけにはいきませんので、本心はともかく、

表向きは怒りに燃えたブルドックとドーベルマンを掛け合わせたような顔をしています。
守られる方の薬師如来様の仏頭、これとは違って優しいお顔。
この山田寺の仏頭、誰かに似ているなと思い、思い当たったのは「由紀さおり」さん。

まずいなあ、昔十二神将の悪口言って、罰が当たり、年末ひどい風邪にかかったのを思い出してしまいました。如来様は罰当てないですね。